

ふるさとの風 弥生

～奥儀抄～

陰暦でいう三月は春たけなわのころ。

異称はどれも明るいものばかり。弥生、桜月、花見月…。

弥生の弥の字には、いきわたる、いよいよなどの意味があり

“いやおひ”が変化して弥生となり、草木がいよいよ生い茂るとされる。

風雨改まりて、草木いよいよ生ふるゆゑに、いやおひ月といふを誤まれり

先駆けて咲く梅を追って木蓮や雪柳が咲き始める。

やがてやわらかな風が春の気配を告げ、桜が出番を迎える。

春風駘蕩 ～春のお伊勢場所～ Spring Grand Sumo Tournament in Ise

待ちわびた桜が花開き五十鈴川の岸辺が桜色に染まる頃、化粧廻しもきらびやかな力士たちが宇治橋を渡る。神宮の春の風物詩、神宮奉納大相撲である。春のお伊勢場所と呼ばれ、昭和三十年の第一回から数えて今年で五十八回目を迎える。三月場所千秋楽の一週間後に開催されるのが通例である。国技・大相撲を神宮に奉納する神宮奉納大相撲の主催は伊勢神宮崇敬会。協賛の日本相撲協会は相撲巡業とは趣旨の異なる恒例行事として第一回より協会あげて取り組んでいる。第一回神宮奉納大相撲が開催されたのは昭和三十年（1955）三月一日。テレビが普及していない時代、熱狂的な観衆が詰め掛けたという。

相撲の起源は神話の中に断片的にうかがい知る事ができる。古事記の天石屋神話では、石屋に籠もった天照大御神を強力な力で引き出した天手力男命あめのたちからおのみことは、天上界で最高の力持ちでありその功績にちなんで内宮の相殿神として祀られ、最古の力士とされている。また国譲り神話に登場する建御雷神たけみかづちのかみと建御名方神たけみなかたのかみの力くらべは、天孫側の建御雷神が勝利し国譲りを成功させる。降伏した建御名方神は長野県諏訪に追いやられ諏訪大社の主祭神になったとある。日本書紀によると垂仁天皇の御前で野見宿禰のみのすくねと当麻蹶速たいまのけはやが日本一をかけて争い、これが相撲節すまいのせちの起源と位置づけられ勝利した野見宿禰は相撲の始祖とされている。相撲は古くから日本人のくらしと強く結びつき神事との関わりも深く、国技として尊ばれてきたのである。

神宮奉納大相撲ならではの華やかな呼び物が神苑で行なわれる「手数入り奉納」。手数入りとは横綱の土俵入りのことである。当日午前十一時、神宮の神職を先頭に呼出、行司、そして色彩やかな化粧廻しをつけた横綱はじめ三役力士が宇治橋を渡る。桜咲き匂う五十鈴川にかかる宇治橋を力士が渡る光景に華やかな中にも厳かな空気が張りつめる。その後、神苑において横綱の“手数入り”と三役力士による“揃い踏み”が行われる。神へ奉納する力士の晴れ姿を満開の桜が見守る。

一方、神宮会館内の神宮相撲場では午前七時より若手力士の稽古相撲が始まる。初切や相撲甚句、櫓太鼓の披露などがあり、午後から幕内力士によるトーナメント戦が行われる。本場所さながらの熱のこもった取組に場内は歓声に包まれる。陽春の伊勢で神へ技の限りを奉納した力士たち。清新な気持ちで次の春巡業へ向かう。

昭和を代表する大横綱が今年一月この世を去った。不世出の天才横綱大鵬——。
大鵬の名は中国の古典にある伝説上の巨大な鳥に由来するという。

「巨人、大鵬、卵焼き」という言葉に象徴される昭和の高度成長期の主役の一人、大鵬は彗星のようにさっそうと現れ、一世を風靡し日本に夢と希望を与えた。心・技・体、相撲の歴史に名を刻む類稀なる名力士であった。横綱大鵬も幾度となく宇治橋を渡りその勇姿を神の御前で披露している。

今年平成二十五年の神宮奉納大相撲は三月三十一日。
桜咲き誇る神苑で手数入り奉納を行う力士の姿を天高く見守る巨鳥大鵬の姿があるだろう。
大きな翼を柔らかな春風にのせて—。

そして…

内宮神苑奥深く天手力男命と横綱大鵬の力くらべは永遠につづいている…かもしれない。

